

デーリー東北

2021年(令和3年)3月8日(月曜日) (11)

商業化が伝統継承の鍵

⑧・完次の時代へ

北国に咲く 菱の花

～南部菱刺しのこれから～

つた江戸時代の農民が防禦のため、布目をふさいだことから生まれた。

南部菱刺しも似たルーツを持ちながら、知名度はこぎん刺しの方がリードしているのが現状だ。こぎん刺しの中に、菱刺し活性化のヒントがあるかもしれない。

「伝統工芸は仕事にすることで残っていく。思いだけでは続かない」。おいらせ町出身のグラフィックデザイナー

山端嘉昌さん(37)＝東京都在住＝は、「伝統工芸を商業活動に結びつけることの重要性を人など、それぞれに手仕事への情熱を持って、南部菱刺しと向き合っている。この菱の花」を大きく、さらにたくさん咲かせるには、どう育てていくのが良いのだろうか。

山端さんは、こぎん刺しの模様の新たな活用方法を模索するプロジェクト「kogerinet」(コギンドットネット)を主宰。大崎町の「星野リゾート界 津軽」の部屋

や、野辺地町出身のサッカー選手柴崎岳さんのスパイクなど、こぎん刺しのコラボ企画を監修してきた。今も、各企業から仕事の依頼が絶えな

今回の取材で、作家から「よやく津軽」きん刺しと間違われ「どきん刺し」の誤りも、津軽地方の「こぎん刺し」も、寒を脱ぎ捨てるのしかかなか

作家の連携、販路開拓課題



青森県南地方では展示やワークショップ、グッズ販売など、さまざまな方法で菱刺しの魅力を発信している(写真はコラボ「シユ」)

をデジタルデータ化して、印刷を可能にすることで、布ならではのアイデアも注目を集めていく。紙やプラスチックは、模様クなど、さまざまな素材にこ



大学の菱刺しに関する授業を行っている川守田礼子准教授。「作り手だけでなく、積極的に伝統工芸に関わる人材を育てたい」と語る川守田大

ぎん刺しのデザインを施せるため、多彩な商品を作り出せるという。高校時代、弘前市で行われた展覧会でこぎんの古作に出合っ以降、研究を続けきた山端さん。「見た人がデザインを気に入って、本物の刺しの魅力にたどり着いてくれれば」。斬新なデザインやビジネス展開と、伝統の継承は、山端さんの中で矛盾することなく一つの道として重なり合っている。南部菱刺し作家たちの現状を調査し、論文にまとめた「戸工業大の川守田礼子准教授はこぎんに負けないくらい魅力を持つ菱刺しは持っている」と、その可能性を信じて一人だ。ただ、菱刺しには経済的な基盤が弱く、販路開拓や製品のPRに苦勞している部分がない。(小林彩乃)

※この記事・写真等は、デーリー東北新聞社の承諾を得て転載しています。